

記憶の旅

志水久之

車は高速道路を下りても、全くスピードは落ちていない。

狭い川沿いの道だから、対向車はまれだが、白バイが見つけたらすぐに追いかけてくる速度で走っている。

「誠君、運転だいじょうぶ？」

後部座席から心配そうに声をかけたのは、木田良子だ。

「はは…何言うとるんじや…五十年も運転しとる者に言う言葉か？」

「年寄りの運転じゃあないみたいだから…」

「今までに事故起こしたことないの？」助手席の水野優子が前方を見たままで言う。

「おれは無事故、無違反のホールド免許だぞ」

「でも、怖いわ」良子が声を震わす。

後部席の土屋実の頭に一瞬ニューステロップが頭を過ぎった。

『男性二人、女性二人の乗った乗用車が川に落ち全員死亡。原因はスピードの出し過ぎ』

このニュースを見た人は、きつと（馬鹿な若者の暴走）と誤解するだろうと、思わず苦笑した。

「まだ時間は十分ある…日比君、ゆっくりでいいよ」土屋が言うと、日比は素直にスピードを緩めた。

四人の老人を乗せた黒いベントンは秘境寿温泉へあと十キロの山道にかかった。みんなを不安がらせた日比誠の運転だったが、自慢するだけあって曲がりくねった道を軽快に走っていく。若者が運転しているように見えたベントツだが、リアウインドウには七十五歳以上の者が運転する印の（枯葉マーク）が貼ってある。

「集まったのがちようど四人で、よかったよな…車の中が楽だろ」と日比。

土屋実がよく響く声で車内の三人に聞こえるように言った。

「…とうとう、北山中三年一組の同級会参加者はたったの四人だ…喜寿の記念だから、もう少し集まると思ったのだからなあ」

「本当にね、卒業のときは六十二人もいたのにねえ…一泊旅行となるとね」

「還暦のときは十三人…古希は九人の参加があったんだがねえ」土屋は嘆く。

疲れもなく運転している日比が言う。

「たとえ一泊の旅行でも、(健康)と(時間)と(金)の三つが揃わないと年寄り、そう簡単には出かけられないからなあ」

「三つじゃないわ、もう一つある…(しがらみ)っていうの…わたしたち四人とも、今はつれ合いというものがなくてしょ…みんな独身。それに介護をしなきゃいけない人もいないからね…しがらみがない四人だけが集まったということ…」と助手席の優子。

「うん、もうすぐ自分が介護される側になるんだけどな」と日比が茶化す。

「でも、いいんじゃない…誠君の高級車でダブルカップルで仲良く温泉に行けるんだもん…贅沢だわ」シートをかなりへこませて座っている良子が浮き浮きとした声で言った。

ベントは、さらに狭く急坂になった山道を軽々と登っていく。道の両側に紅葉した風景がどんどん後ろへ過ぎ去っていく。

「もう少しで寿温泉だ…旅館に着いたらすぐ飲もうな」

「誠君は、本当に酒好きだもんね」

「日比さんだけじゃあない。この四人全員が飲み助だわ」と優子。

日比は、まだ飲んでいないのに赤ら顔だ。髪の毛が微かになった頭を左手で撫でる。

車は左に溪流を見て、右手の紅葉を愛でながら進んでいく。目的地に近づくにしたがって、乗客たちはすっかり旅行気分になってきた。

道がなだらかになったとき、古ぼけたアーチが見えた。それに(寿温泉郷)と読める看板をくぐった。両側に四、五軒の旅館らしいものがある。

「土屋さん、この辺りかな？」

「いや、白寿旅館はもう少し先だ」

道は車一台がようやく通れるほどになり、この高級車はますます周りの景色とは似合わなくなってきた。道路の下の方に白く光る溪流が見える。道路脇にその景色を展望できる休憩所があったが、日比は、それを横目で見て車を宿に進めた。

「土屋さんはどうやって、その白寿旅館を捜したんだね？」

「うん、旅行雑誌の秘湯の宿特集からだよ…コメントにね、シルバーカップルにぴったりと書いてあったんでね」

「ふーん、まさに、わたしたちはシルバーカップルということね」と後部席の良子。

「カップルじゃあないけどね…ただ、温泉は混浴だ」

土屋はみんなにガイドをする。

「…ただ、ここは冬が早く来るんだ。楓やツツジの一葉一葉はあと一と月もすると全部枯

れ果て土にかえるのだそうだ…何だか身につまされるよなあ」小声になった。

日比は、早く湯に入りたい、酒も飲みたいのでアクセルをさらに強く踏んで、目的の秘境の湯に急いだ。またみんなを不安がらせる運転だったが無事、目的地に到着した。

白寿旅館は、名前のわりには、ペンション風の部分があり、昔風の旅館とがちぐはぐに合体した建物だ。ここより先には車が通れるような道はなく、細い山道だけが山奥の方に延びているようだった。この辺りも山は真っ盛りの紅葉に彩られている。この景色は老人たちでさえ気持ちよくなった。浮きたたせるものがあつた。

車の音を聴いて、宿から若い男女が玄関先に、にこやかな顔で現れた。夫婦らしいこの二人は（HAKUJU）と染め抜いたそろいの胸当てエプロンをしている。秘湯の宿で働いているにしては似つかわしくない。

「ここつて、秘湯の宿、白寿旅館だろ？」

「ええ、白寿旅館でまちがいございません」とエプロンのローマ字を指して言った。

四人が通されたのは（白寿）の名前がぴったりの少し黄ばんだ畳の和風の部屋だった。

十畳ほどの広さの和室が三つ、楓の絵が描かれた襖で隔てられている。部屋の真ん中に骨董品ともいえる座敷机が置かれている。

そこに、人間の骨董品のようなお婆さんが、作務衣を着て、お盆に急須と湯飲みをのせて入ってきた。「おいでなさいませ…お茶とお菓子をどうぞ召し上がってくださいませ」

手が震っていて、湯飲みがコトコトと音をたてる。そのお盆を受け取って優子が「お婆あさん、だいぶのお歳のようにですけど…おいくつ？」と訊く。

「わしは九十二になります…まだボケてはおりませんよ」

「へーえ、じゃあ、お婆あさんは俺たちの大先輩だ…俺たちは全員七十七だよ」

「あれまあ、若い人はいいねえ…こんな山奥まで自動車でこられるんだもの」

「何年かぶりに（若い人）って言われたよ」

「お婆あさん、まだ明るいので、夕食までにどこか近くに見物できるいい処ない？」

「そうだねえ…この奥に（物忘れ神社）というのがあるんだがお…」

そのとき、後ろから声が出た。このお婆あさんの息子夫婦らしい。六十台前半だろう。旅館を営んでいる主人と奥さんのようだ。

「ばあちゃん、神社はだめ」と窘める。それから四人の前にきちんと座って

「この宿の主人と家内でございます…今日は他にお客様ございませんので、ごゆっくりお寛ぎくださいませ」と、主人が挨拶をした。

「ここに来ていただいたなら、まずお風呂です…温泉はとていいお湯ですよ…ここは温泉がいちばんのご馳走ですよ」と女将が勧める。

この白寿旅館の川側に面して、露天風呂がある。秘湯というだけあって、鄙びた情緒が漂う温泉だ。混浴だが、岩が巧みに配置されていることと、他の客がだれもいないというので、四人いっしょに入ることになった。

優子も良子も「こんなばあさんの裸なんか出し惜しみするもんでもないし…」と言いながら一応バスタオルを巻いて露天風呂にやってきた。

日比は、白濁した湯から立ち上がって上半身だけ見せる。

「昔だったら、この肉体、見せたくてたまらなかったけどな…こんなに萎びた身体は自分が見てもいやになる…」左肩から胸にかけて事故か手術痕がある。

「これは、おれの勲章だよ。若いとき工場の機械でやっちまった…死に損なったよ。下の息子はまだ健在だけどな…」

四人は、混浴の露天風呂に妙に興奮して老人とも思えない大声を出す。

こういう場面になると年老いた女性は恥じらいがだんだんと遠ざかっていく。

そのうち、優子と太った良子は、かわるがわる岩の上に立って身体をくねらせ、ポーズをとったりし始めた。

土屋は、そんな様子にあきれて湯から上がって、ぼそりと言った。

「恥じらいと色気は同義語だよな…酒も入っていないのに、よくやるよ」そして「さあ、部屋で飲むぞ」と、露天風呂から出て部屋に戻っていった。

部屋でビールでも飲むつもりでいたが、宿の外はまだ明るい。飲む前に、どこかその辺りを散歩しようと宿の浴衣に着替えた。

宿の玄関先に来たとき（HAKUJU）のエプロンを着けた若旦那が声をかけてきた。

「お散歩ですか？」

「うん、夕食までには帰るけど、あのお婆さんが言っていた何とか神社というのは、どこなの？」

若旦那は、急にあわてて「ああ、物忘れ神社ですか…本当は月之火神社というんですがあそこは今から行くには、ちよつと…途中、吊り橋を渡らなければいけないし、トンネルも通らなければ…それに…」と何かを隠しているようだ。

「夕食を早めにご準備させていただきますので、この近くでどうぞ」とペンションのオーナーらしい笑顔になって言った。

土屋は、余計にその（物忘れ神社）に興味をもったが、若旦那のすすめに従った。

夕食は、ペンション風のはなれにある食堂に準備された。

主夫婦が厨房から、盆にのせて次々と馳走を運んでくる。内容は山の旅館に相応しく、猪の肉鍋や椎茸など山の幸が並べられた。ペンションには似合わないが、椅子・テーブルで食べられるので老人たちは喜んだ。だれもが、正座やあぐらをかくことが難しくなっているからだ。

「この料理は、ご主人がつくられるんだね」

土屋が訊ねると、意外な返答が返ってきた。

「いや、料理はうちの婿がやります…あれはM市でフランス・レストランにいたんで、腕だけは確かなんです」

土屋は、秘境の宿でフランス料理が出るようになるのも時間の問題だなと思った。

テーブルに酒が準備されたとき、土屋が両手を腰にして真顔で言った。

「乾杯の前にひとこと…人数は少ないが、一応この会は北中三年一組の同級会です。六十二年を経て、まだ同級生と酒を酌み交わすことのできる幸せをかみしめて、乾杯しましよ…：喜寿おめでと…：乾杯！」

土屋はコップに注いだ吟醸酒を飲みながら考えていた。

半世紀以上も前に同じ場所にいたというだけの四人なのだ。卒業後は、それぞれが全く違った人生を過ごしてきている。しかし、現在、独り身だとか、大の酒好きだとかいう似た境遇にある。しかし、まだ何か他に共通点があるにちがいない。

この時に、この場所にいっしょにいるということに、何か運命的なものを感じていた。

飲んだり食べたりしているうちに、なぜか誰もが口数が少なくなってきた。

老人たちが食事中に黙ってしまうことはよくある。

この年代、昭和一桁生まれは、圧倒的な食料不足の時代に育ち盛りを過ごししてきた。「支那事変」にはじまり「国家総動員法」「大政翼賛会」と幼児期を過ごし、小学校に入ってから、日本は太平洋戦争に突入している。小学校を卒業するとき大空襲を経験しているが、戦地には行っていない。学徒動員も自分たちより一年前で終わっている。しかし「玉音放送」がどういふものだったのか理解できる年齢になっていた。

中学生だった時の三年間の食料事情の変化は、現在の食生活の変わりようなどとは比べようもないほど、一年一年での大きな変化があった。

昭和一桁生まれの大半のものに共通する染みついた食事習慣ができあがった。

(食事中会話をしない)(目の前のものを残せない)(好き嫌いを言わない)などだ。しかし、老人たちの目の前に並んだこの宿の食事は、ずいぶんの量だったので、さすがに食べきれず残ってしまった。

良子が残念そうに、いつまでも、ご馳走をつまんでいたが「これ部屋に持ってきて…酒の肴にするから」と頼んだ。

食事が終わると、急に饒舌になって意味のないことをしゃべって部屋に戻ってきた。

全員がそろったところで、土屋は、また幹事らしく話し始めた。

「なにはともあれ…この四人がこうやって、温泉に入り、酒が飲めるというのは幸せだよな、日比君」突然同意を求められたので、ちよつとあわてて「おお、そうさ幸せだよ…」と言って、盃からコップに替えた。

土屋の幹事の口調が元労組委員長の演説調に変わった。いつもそうなのだが、酒が入ると演説をしたがる。この癖をよく知っているので、半分はあきれながらも拍手をした。

「…そこで本日、ここにお集まりの皆さんにお願いがあります。喜寿を記念して、今まで生きてきた中で、いちばん頭の中に残っている出来事を話してもらいたいです…その出来事が幸せなことであっても地獄だったとしても、過ぎ去った自分の歴史をみんなに聞いてもらうことは、先の時間が少なくなった我々には意義あることではないかと…」

まだ演説が続くと感じた良子が遮って

「わかりました、わかりました…話したいことがあるの、わたしからでいい？」

土屋は手で、それを制して「いやいや、その順番はゲームの後で…」と言う。

土屋が提案したゲームとはこうだ。

「年寄り専用、ぼけ老人がボケを楽しむゲームだ。人の名前…たとえば映画俳優のどれかを決めてその俳優についてヒントを出す。そのヒントから俳優の名前を思い出して当てるといわけだ」と説明してから

「まず練習…ぼくが頭の中を思いうかべた俳優は誰でしょう…『君の名は』に出ていた岸恵子の相手役の俳優は誰でしょう？」

「えーっと、佐田啓二」水野優子が答える。

「そう正解。ゲームのやり方のわかったら本番だ」

土屋はこんなふうを考えていた。

喜寿を同時に迎えた自分たちは、同じ時代を生きてきた。つまり同じ時間と同じ空間を

生きてきたはずだ。だから、自分たちにはお互いに似た記憶が残っている。同じ頃に流行った映画や流行歌はだれもが一度は自分の頭の中に定着させたはずだ。

その共通の記憶も人によって、忘却のかなたにいつてしまった人やまだ覚えてい人もいる。このゲームをすることで、みんなが同じ時代を生きてきたことを実感したいのだ。

今度は、土屋は先生口調になる。若いとき教員になりたかったのだ。

「歳をとるとどうして、物覚えが悪くなったり、記憶が薄れるのか、わかるかな？」

「頭が老化するから……」「呆けるから……」「おぼえていたくないから……」

「ちがう、ぼくが思うのには神様の仕業なんだ。人は歳とともに確実に死に近づく。死を意識する……死ぬのは怖い。つまり、物忘れは人に死の恐怖を忘れさせるためなのだ」

日比が出題する番になった。

「これは、どうだ（イヨマンテの夜）を歌っていた歌手は？」だれもその名前が出ない。

「おれの優勝だな……答は（伊藤久男）だよ」日比が最初に話をする事になった。

夕食の残りを肴にして、飲みながらの『喜寿のお話会』が始まった。

『日比和夫の自慢』……

「俺は、みんなが知っているとおり中学校しか出てへんけど、今は中小企業だけ一応社長やつとる……自慢じゃあないけど、大学出の土屋さんより金持ちだ。その訳は俺が事故にあった事なんだよ。中学出てすぐ仕事するつもりはなくて、俺はグレまくってた。十九のときに、親父がアル中で死んじゃったんで、俺完全にひとりぼっちになったわけだ。働かなきゃあしうないんで、親父がやってたチョロイ仕事を引き継いだわけだ……」

父親のチョロイ仕事とは、パチンコ台の前面についているハジキばねを組み立てる作業のことだ。収入は微々たるものだった。家の土間に道具と機械が置いてあったので、それを使って組み立てをやってみると簡単にできた。働けば金を得られることが判った。

ある日、組み立て終わった部品をいつものように自転車の荷台に積んで、パチンコ台の組み立て工場に運んでいた。腹は減っているし、荷物は重い。自転車は右へ左へとふらついていた。そこへ後ろから来た高級車とぶつかった。自転車は倒れ、荷台のパチンコ部品が大きな音をたてて、道路に広がった。車からあわてておりてきたのは、長身で銀髪の人だった。少し酒の匂いがしていた。その人は、和夫を起す前に道いっぱい広がった部品を拾い集め、荷箱の中に入れることを先に始めた。まわりの人の目をしきりに気にしているみたいだった。

「この紳士は、俺から住所なんかを書いていったが、後で何かしてくれるようなことを期待はしていなかったな。パチンコのパネを全部、箱の中に拾い集めてくれたので、親切な人だなあと、そのときは思っていたんだ：ほんとだよ。ところがびっくりした。次の日に新しい自転車とお金が届いたんだよ。それだけでなく、俺がひとりでパチンコばねを作っているのを知って、自転車の部品をつくる機械を土間に備えてくれて、うちの部品をつくってほしいと頼まれたんだよ。この紳士は杉野さんといって、有名な自転車メーカーの社長さんだったんだ。それから、ずーっと今でもスギノ自転車の部品工場をやっているという訳だ。俺の話はこれでおしまい。これ、ほんとのほんとの話だよ」とわざわざ念を押した。「次は水野さんだ。本当の話をしてよ」と命令口調で言った。

『水野優子の秘密』・・・

「きょう、はじめて秘密の話をするわ：実は私、一度も結婚したことないのよ。うそって思うでしょ？ 本当なの」

良子が真つ先に口をはさんだ。

「うそ！ じゃあ、亡くなったみどり幼稚園の園長さんはご主人じゃあなかったってことか？」

「前の園長だった緑川と私は、人からは夫婦と思われるけど、届けを出していないから法的にはあの人は夫とはいえないの：だから私独身よ：夫のことだけじゃなくて、私、子どもを産んだことないの。今の園長は緑川の連れ子なのよ」

水野優子は三十九歳のとき、五十一歳の緑川と知り合った。一ヶ月後にもう緑川と同棲をする仲になっていた。

緑川は、結婚式はともかく、すぐ婚姻届は出したかったし、園の職員たちにも披露しなかったのだが、優子はなぜかそうしなかった。

そんな状態で三ヶ月過ぎた頃、緑川が急に身体の変調をきたした。入院しなければならなかった。肝臓癌と診断された。

優子は医者から、緑川の余命は半年と告げられた。夫にはそれを隠した。

「私、毎日緑川を見舞ったわ：どんどん顔色が悪くなっていくのを見て、もう永くはないと判ったの。そんなとき、ベッドで、私に結婚届けの用紙を持ってきてくれと頼むのよ。私すぐに役所へ結婚届の用紙を取りに行き、自分の欄だけ書き込んで印鑑押したものを病院に持って行ったの。でも、間に合わなかった。私が病院に着いたとき、緑川は息を引き

とったの…あれから、私、ずーっと幼稚園をやってきて三十七年…あつという間ね」

優子は話し終わって、目の前の冷めたコップ酒をぐつと飲んだ。

「この酒って、何だか言わなくてもいいことを言わせるみたい。でも、秘密というのは、しゃべっちゃうと楽になるものねえ…お次の方は、木田良子様の隠し事ですよ」

『木田良子の悩み』…

「わたし、きょうはわたしの最大の悩みを打ち明けるわ」

「わかってる、良子さんの悩みは…体重のことだ」

「とんでもない、わたし、デブのこと何とも思っていない…自慢にしてるぐらいよ。温泉で肉体美見たでしょう？」

「肉体美の他の悩みって何よ？」

「聞いておどろかないですよ…わたしの悩みはねえ…」と勿体ぶる。

「わたしには、介護しなくちゃならない親や夫はいないし、子どもは、もともといないし…本当に今は気軽な独居老人…」

「わかった、良子さんの悩みは、これから十五年生きるとして、誰に自分の面倒をみてもらおうかと悩んでいる」優子が断定する。

良子は、むっとした顔になって、コップの酒を呷った。

「…ちがうよ、わたしの悩みは、どうやってお金を使い果たそうかってこと」

「何だって？金の使い方？」日比が耳をそばだてる。

「そう、わたし今、銀行に一億二千万円入っている」

「一億二千万円！」急にみんなは目と口を丸くする。ただ、その目はほとんど（嘘だろ）と疑っている。

「そんなお金、どうしたっていうの？」

「そんなに悩んでいるなら、みんなに配ってくればいいし…」

「金が亡くて、命を亡くす人だって、たくさんいるんだ。そういう人に寄付すればいい」土屋は、まだ冗談だろうと疑っている。

木田夫妻には、子どもができなかった。結婚して五年たっても、その気配がなかったの
で夫婦で思い切って産婦人科をたずねた。そして判ったことは、良子には問題はないが、
夫は無精子症ということだった。

夫婦は、表面的には仲の良さを世間に見せていたが、良子は、腹の中で夫は金を稼ぐだけの機械にでもなつて、自分に贅沢をさせてくれれば、それでいいと思うようになった。

木田信夫は、良子の思惑どおり、会社での地位をぐんぐんと上げていって、五十五歳のとき、従業員五千人のＩＴ企業のナンバー２にまで出世した。

自分の会社関連の工場を新設するとき、土地の買収で難しい局面の中、市との交渉で木田信夫は手腕を發揮した。噂では、市長への贈賄があつたということだ。

私的な面でも、活発に行動をするようになって、彼をとりまく女性は五、六人はいた。

良子は気づかないはずはなかつたが、気がつかないふりをしていた。

「あの事故があつたのは、五月五日の十一時頃だつたわ。主人、休日はいつでも外出することが多いのだけど、めずらしく家において庭木の勢定をやつた。わたしは、台所でお昼の用意のテンプラを揚げてたの：ちゃんと覚えてる。そのとき庭の方で大きな音がしたので、あわてて庭に来てみたら、脚立が倒れていて、主人が庭石の横にひっくり返つていたの。それですぐ、救急車呼んだんだけど、もう間に合わなかつた」

ここまで黙って聞いていた土屋が言った。

「それで、一億二千万が木田さんのところに残つたわけだ」

「それにしても、現職中の副社長が亡くなると、そんなすごい金が奥さんに残されるわけだ」と日比が驚いた声で叫ぶ。

「でも、会社の退職金などは思ったほどでもなかつたわ：五千万円ぐらい」

「…ということは、保険金でもあつたの？」優子が身を乗り出す。

「そう、保険金と合わせて今銀行にあるのが一億二千万円というわけ：だけど、子どもがないから残す必要もないし：」

土屋は聞いているうちに、説明のできない腹立たしさに襲われた。

現在日本の経済活動が病的な状態に陥っている大きな原因のひとつに、いわゆる（動かない金）または（死んでいる金）の存在があると土屋は考えている。老人たちがバブル期に貯めた、あるいは貯まってしまった金をどう使うのかわからないまま、当人は不幸な生活を送っている。その実例が自分のすぐ傍にいたことに、あきれると同時に何ともいえない怒りがこみ上げてきた。

水野優子がうれしそうな声で言う。

「良子さん、いくらでもお金の使い方、教えてあげるわ：とりあえず、ここの宿の支払いは全部はらつてね」

良子が顔をしかめながら「それがだめ：現金は絶対持ち歩かないの：ここの費用も自分の分しか持ってないのよ：」

土屋は、無理やり笑い顔をつくって言った。

「木田さん、わかった。お金は死ぬまで大切にするんだよ：使い方は自分で考えてね」

そして、さつきから考えていたもう一つの（四人の共通点）が判った。

四人とも、血のつながりのある子どもが存在しないということだ：もうこの先、子どもができる可能性はゼロだから、この代で遺伝子は子孫に伝わらないということだ。

『土屋実の人生』・・・

「大学生のとき、ある女性と一年間、同棲生活をしていたんだ。子どもはできなかった：というより作らなかった。同棲の相手は、ぼくが四期生のとき、同じ大学の二期生の矢島澄子という女性だ。頭のいい美少女だったな：」

そのころ、世の中は学生運動の真っ直中だった：全学連の闘士だったぼくに、澄子の方から積極的に近づいてきて同志になったんだ。それから、安アパートにふたりで住み始めた。夫婦きどりだった：本気で惚れてたな。本物の恋とはこれなんだと思っていた・・・

だけど、彼女は、卒業をきっかけに学生運動をやめちゃった。どうしてか判らなかったなあ。そのとき、ぼくはまだ学生だった。そのうち学生運動が衰えていって、それと同時に、同棲生活も自然消滅したんだな：その後、彼女がどうなったのかは知らないし：気にもならなかったな」

土屋は、話の内容のわりには表情が変わらない。興奮の色もない。

コップの酒を一気に呷った。

酒は、ときとして自分の内にあるものを表出させてしまう作用を起こす。

「大学を卒業するのに六年かかった。一般の会社への就職は、学生時代の前歴のために全部だめだったな。しかたがなく市職員になったんだね。M市役所に勤めることになったんだけど、毎日が味気なかった。灰色の事務机に毎日座っていた。

そんなときだった。自治労の委員長が声をかけてきたんだ。労組の専従にならないかという誘いだ。ぼくは、その誘いにのったね。市から給料をもらって、組合の仕事に励む毎日になったよ。組合活動はおもしろかったなあ。五年たって、自治労の執行委員長になった。毎日が充実していた。自分は確かに生きていると感じてたのは、この時代だけだな。

ぼくの下には一万五千人の兵隊がいると思っていたからね。市職員はもちろん、市会議員

どころか、市長でさえぼくの思うままになるといふ勢力だったからね。

そんなときに、大学のときの友人が澄子の消息を知らせてきた。彼女は梶田という弁護士と結婚しているらしいということだった。風の便りなのに胸が騒いだよ。

夫の梶田のことは、こっちが調べなくても、いやでも梶田のことは知ることになったんだ。有名人だったからね。弁護士時代に、主婦向けの『損しない主婦の経済』などという法律本を出版したり、TVで法律相談番組やバラエティにまで出て世間に名が知れるようになった。この人気を利用して、梶田はM市の市長に当選したんだよな。

梶田っていう男は童顔で如才ない風貌だが油断ならない奴だ。収賄の容疑を上手に握り潰していたらしい。澄子の夫でなくても憎たらしい男だと感じてたよ。このときぼくは、M市自治労の執行委員長だったから必然的に梶田市長と喧嘩することになったんだな」

土屋は自分の話に酔うように話し続ける。

「いやな男だったが、ぼくの市労組には一目おいていたな…現在のどこかの市長みたいに、職員を上から押さえつけるようなことは、絶対させなかったからな」

この頃、市長は土屋を自分の家に招待した。組合を懐柔する目的があったんだろう。

土屋にしてみれば、二十数年ぶりに澄子と会うのも、人生のひとつのスリルだという程度の気持ちで市長の家に行くことを承諾した。

市長の家はM市からは五十キロほど離れて、隣りの県にある。

白樺の木々の間からぼつぼつと丸太小屋の見える別荘地だ。梶田の家だけが白壁のヨーロッパ風の三階建てで目立っている。梶田はここを弁護士事務所として登録していたが、実際には妻が生活の場として使っている。

梶田が土屋を家に招いたのには理由がある。次期の選挙戦の目玉として、M市の小中学校の給食費を無料にする条例を打ち上げる準備をするためだ。市長は自治労のバックの共自党を抱き込む必要を感じていた。(主婦の味方)をキャッチフレーズにしていた市長とすれば、必ず実現させたいアイデアだったのだ。

夏の昼の暑気がようやく収まってきた午後七時、梶田の運転する車が到着した。先に降りた梶田に促されるように後部ドアから、土屋実が降りてきた。

土屋は、二十五年ぶりに会う澄子は、自分のことを覚えているだろうかという不安と期待のようなものが胸中で渦巻いていた。

梶田はなかなか用件を口にししないで、二階のベランダに用意した酒宴の席に招いた。

「このディナーは妻の手作りですよ…きょうはゆっくり三人で飲みましょう…土屋さん」
梶田は（おーい）と妻を呼んだ。
ベランダに梶田の妻が現れた。

（初めまして、梶田の家内です）とちよつとだけ頭を下げてから土屋と目を合わせた。
ふたりが同時に何ともいえない呻き声を発した。声にならない声だったが、すぐ傍にいた梶田はふたりの様子を訝った。しかし、何もそれ以上訊かなかった。

「二十五年ぶりの澄子だったけど、変わっていなかった。梶田はふたりの関係をそのとき、もう知っていたのかも知れなかったな…きつと」

土屋は、みんなが自分の話を聞いていようがまいが、全くかまわず話し続けた。まるで自分自身の生きてきた足跡を自分で辿るような気特になっていた。

他のみんなは、自分の話は済んでいるし、土屋の長話には、すでに興味を失っていた。
案の定、日比と良子は酒を注ぎ合って飲み続けている。優子は座椅子にもたれて酔眼で横向きで聞いている。

人は、自分に関わりのない話には、実はそんなに興味をもたないものだ。

翌朝は、四人の老人は昨夜の酒量にもかかわらず、日の出前にそろって目覚めた。

昨夜、自分の人生の中で重大な転換点などをお互いに話してしまっているのに、そのこと自体を忘れ去っているようだ。

山の紅葉はますます鮮やかに秋空の碧を際立たせている。

ペンションの若夫婦がさわやかな笑顔でやってきた。

「おはようございます…よくおやすみになれましたか…ご朝食の用意がしてございます」

朝食の準備がされたペンションの食堂に、そろって出かけていった。

食堂の中には、朝食の香りが充満している。味噌汁の匂いに混じって香ばしいコーヒーやパンの香りもある。四人はこのとき一瞬、それぞれが別々のデジャヴュを感じていた。

（匂い）は、いちばん人の記憶を強く呼び起こさせる媒体になるらしい。眼で見たものや音声よりも強く記憶に作用する。老人たちは、この同じ（匂い）を嗅いだのに、今は四人が別々の過去の思い出や場面を頭の中に蘇らせていた。

けれども、今朝は、だれもがそれを言葉として発するものはいなかった。黙っていた。

朝食をしずかに食べ終えると、土屋が若夫婦に訊ねた。

「さて、帰る前にせっかくだから、どこか、みんなが歩いていける良い所を教えてくださいな

いかな？」

「そうですねえ…この近くなら…」若旦那は考えている。

「きのう、月之火神社のことを言ってたよね」土屋が散歩しようと思っていた所だ。

「あ、月之火神社ですか？ そんなに遠くではないんですが…途中に吊り橋やトンネルがあったりして…実は、あの神社で事故が続いたんです…お年寄りが急病になったり…」

「年寄りには無理だということかな？」土屋は怒ったような声で言ったので

「いや無理ではないのですが…」と言い淀む。いつのまにか現れた大おばあさんが

「みなさん、お若いから（物忘れ神社）には行かれるといいですよ」とわざわざ若旦那の前にしゃしゃり出て、低い声で言った。

若夫婦が顔をしかめたのを横目で見て、土屋はみんなに、同意を求めた。

「じゃあ、その神社までみんなで行ってみましょうか。木田さん吊り橋、大丈夫？ 優子さん、トンネルいいよね？」

白寿旅館の裏手の細い山道を歩き始めると、すぐに溪流が見えてきた。行く手に幅七十センチ、長さが三十メートルほどの古びた吊り橋があった。渡り口の柱に建立昭和二十五年）と記されている。先頭の日比がこの銅板をみつめて言った。

「この橋はおれたちより若いぞ…良子さんでも壊れんと思うよ」

日比を先頭に、小学生の遠足のように一列に並んで吊り橋を渡り始めた。

橋の下の溪流が美しい。周囲の紅葉も老人たちを祝福するように見事に輝いている。

ただ、渡っている四人の眼には、この美しい景色は入ってこない。ただ、足下の古ぼけた木の板を見つめて、一步一步足を進めることだけだった。

周囲の風景はもちろん、昨夜、話した自分の秘密も他の人の事も、完全に頭の中から消えていた。あるのは吊り橋を渡っている今という瞬間だけを体感しているのだった。

吊り橋を渡り終えると、すぐ目の前にトンネルの入り口が現れた。トンネルといっても全長五十メートルほどで、入ってすぐに前方に出口の明かりが半円形に小さく見えている。もちろん内部には電灯ひとつ灯っていない。

「どうする…手をつないで行こうか？」

土屋はみんなに提案する。ブリューゲルの（盲人の寓話）という絵を思い出していた。

「いや、かえって危ないから、一人一人が出口を目指して行きましょうよ」優子が言う。

「優子、つめたいのねえ」と良子。

遠くに見える出口の明かりだけを見て、手探りで歩き出した。足下が心許ない。

遠くにある希望や夢だけを追いかけるときは、今という現実が疎かになるものだ。全員が自分の力で、暗がりにも耐えて、出口の明かりをたよりにトンネルを抜け出た。トンネルを出たすぐ山手に石の階段があり、その上に社らしい建物がある。

小さな鳥居をくぐって、石段を登りつめた。たった十段の石段なのに、老人たちは、口もきけないほど疲れはてて神殿に到着した。

そこは小さな社があるだけで賽銭箱なども見当たらない。鎮守の森が神社全体をとり囲んでいて薄暗い。神木らしい杉の巨木だけが神殿の脇にそそり立つ。

本殿の前が少し広くなっている。そこにお詠え向きに、腰掛けられる石が四つ、神殿に向かって土中に埋め込まれている。自然にその石の腰掛けに扇形に並んで座り込んだ。

腰をおろしたまま誰もが無言だった。

老人たちは、自然に目を閉じた。

神木が風もないのにさわさわと音をたてた。ひんやりと肌寒い。

そのとき：耳の奥、頭の芯のあたりに声が響いてきた。

それは他の誰にも聞こえず、自分にだけに響いてくる声だった。

その声は神の啓示などではない。自分の意識の奥から、竜巻のように湧き上がってくる明確な記憶の塊だった。

● 日比誠の懺悔

『……………俺には誰にも言えない事が二つある…ひとつ、杉野社長に車をぶつけられたのではない…あの頃俺は…アタリ屋をやっていた…止まった車の前に出た…自転車をぶつけたのは俺だ…社長は酔っていた…慌てていた…この後……………俺は社長を脅し続けた……………まだある…絶対だれにも話せない…俺は飲酒運転で轢き逃げ…逃げた…轢いたのは自転車…乗っていた中学生…生きていたのか死んでしまったのか知らない…忘れていた?…』

● 水野優子の成功

『……………若い頃の収入は結婚詐欺…騙したのは六人…そろそろ…いい男がいたら本当に結婚しようと思った…本当の結婚?…見つけたのが緑川理事長…経過つが安定できる…結婚を迫った…緑川は届けを出したがらない…どうして?…届けを出したかったのは自分…緑川は渋った…どうして?…私を信用していなかった…緑川が死ぬ間際…うまく間に合った…遺産も幼稚園も手に入った…この記憶を消せない?…』

●木田良子の後悔

『…………庭木の剪定をしていた夫が脚立から落ちた大きな音がした…何だろうと縁側まで出た…胸のあたりから血が流れ出ていた…何か言おうとしていたあの顔…声は聞こえない…救急車を呼ばなきゃあ…保険金が…すぐ呼んでいけば助かったかも…あのとき…台所でんぷらを揚げていた…保険金七千万円…てんぷらを揚げ続けた…三十分待った…苦しかった…庭の夫を見に…動いていなかった…救急車を呼んだ……葬儀の日焼香の最中…七千万が頭をよぎった…口角と頬が弛んだ顔を…夫の姉が見ていた…いやな記憶…』

●土屋実の記憶

『…………市長の家での澄子の顔…二十五年前の記憶…あのとき恋をしていたって？…いっしょに暮らしていた…澄子も同じ？…恋愛の記憶…遊びだった？…本当に真剣だった？…不思議な再会…再会後…ゲームの始まり…二人だけの秘密…加わったスリル…本当の恋？…逢う…中年同士の古くなった記憶だけの興奮…梶田に知られた…これで三棘みの秘密の関係ができあがった…三人とも誰にも話せない…それだけだった……表面的に何の変化もない…梶田は市長を澄子は市長の妻を自分は労組委員長をそのまま続けた…こんな酷い記憶は自分で消すことができる…消したはずだった…消えない記憶…』

その時間は、たった数十秒の間だった。

四人の老人は神殿の前で、気を失ったように四つの岩の椅子に掛けたままだった。神木が風でざざざざと威厳のある音を立てたとき、老人たちは目を醒ました。

ふらりと立ち上がると、来たときのように一列に並んで帰り道を歩いた。

来たときと違うことは、誰一人、口を開かなかったことだ。

トンネルの帰り道は、暗がり目慣れていて危なげなく通り抜けた。

吊り橋も来たとき、あんなに怖いと思ったのに、帰りは老人らしくない歩みで渡っていた。ただ橋の周囲の紅葉が色あせていた。溪流も不気味な灰色をして流れていた。

吊り橋を渡りきった瞬間、老人たちは、自分自身の奇妙な変化を感じた。それは身体の状態だけでなく、意識の中にあつた鉛の塊が、泡となって消えたように感じたのだった。

内なるものだけでなく、周りのものすべてが確実に変わっていた。

白寿旅館に駐車してあつたベンツに乗り込んだときには、だれもが昨日の夜に話したことも、今日の月之火神社の岩の椅子に座ったときに蘇ってきた記憶も全く忘却のはるかか

なたに消え去っていた。

過去の記憶も未来の夢もなく、『今』という時間だけにいる老人四人がそこにいた。

誰からともなく、心のこもらない会話が始まった。(楽しかったね)(また来たいね)(きつと来ようね)(いつまでも元気だね)(傘寿の時は何人になるかな?)

帰りの車では、だれもが外の景色を見ていなかった。大きな疲れが老人たちの肉体に溜まっていた。特に、日比は運転ができないほどの疲労を感じていた。

「ちよつと休みたい」と溪流の見える高台の展望休憩所に車を停めようとした。

そのとき……

土屋が想像していたニュースが現実のものとなった。

ただ事故の(原因)だけが違っていた。

『…原因は運転の日比誠さん(七七)のアクセルとブレーキの踏みちがいによる……』